TCVV 白書 第 22 号 通巻 26 号 2022 年 12 月 30 日発行（不定期発行） ISSN 2185-9043

秘密結社
声優はVisualに出るな！会議
TCVV
http://www.tcvv.org/

TCVV白書 第22号

総力特集:: どうすれば声優は持続可能になれるのか。

The TCVV Whitepaper 2 0 2 2 No22

目次

巻頭言 3

1 第 21 回 TCVV アニメタレント短期観測調査 4

2 『声優アワード』Watch Vol.8 7

3 ナナニジ Watch Vol.1 8

4 声優システム論 16-声優たちはどういきるか- 9

編集後記 11

巻頭言

声優は Visual に出るな!会議 議長 萱沼真一

持続可能な役者を望む

表題からして今、流行りの SDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) の話かと思われるがそうではない。声優の持続可能性という話である。

昨今の声優事情の流行り廃りの激しい中での**使い捨てられない**というマクロ的な話は言わずもがなであるが逆に人気があるがために発生する別の問題があると考える。本誌では現在の声優ビジネスモデルの脆弱性を指摘してきたが、ここに来てまた別の脆弱性が見えて来たと考えている。

ラブライブを起点とする 3 次元と 2 次元の積極的な融合をした企画が出て来てから幾久しい。ラブライブの成功を見て、それを模した同様な企画が雨後の筍のように出現した。そして、過度な競争によりビジュアル (3 次元) を全面的に重視した企画が多くなった。

Visual を全面に出す売り方により 3 次元側活動が過度になり声優自身の負担が大きくなって来ている。
身体的な怪我、精神的負荷などにより降板せざるえない事態に陥ることもしばしばである。実際問題として先般、ラブライブにて楠木ともりの降板があった。これによる作品へのダメージは計り知れない。

本来声優とは役者の部分集合であるが、昨今では部分集合ではなく独立したものに分化していると考えている。その分化の最たるものが「アイドル化声優」である。アイドル化は声優ではなく通常のアイドルとして考える他ない。それ故、アイドル性を過度に出す売り方により恋愛問題が発覚した場合に過度なバッシングなどに発展し、休業や活動自粛、最悪のパターンは廃業である。
このことについては本誌を始め様々なメディアで広く言及されているので周知のことと思う。
そして、いずれの例をみても至るところは作品の崩壊である。

話は若干脇道にそれるが、約 10 年前にデビューした人が、ここに来てようやく花が咲き実を結んで活躍をし始めてきた人もかなりいるように見える。アイドル化路線に対して地道に演技を研鑽してきたことは称賛に値し敬意を払いたい。

閑話休題。
持続可能な活動ができるように役者を守り、また我々聴衆側の心理的安全を確保する唯一の解決策は Visual を全面に出した昨今の売り方を制限すべきであり、ちょうど今がその時だと考える。
巻頭言から結論めいた話をしてしまったが以上のような諸問題を今回は持続可能というテーマで各記事をまとめてみた。詳しくは本文をご覧いただきたい。

調査記事

1　第 21 回 TCVV アニメタレント短期観測調査

TCVV 情報管理部 調査課 短観担当

1.1　TCVV 短観概要

経済指標を示す「日銀短観（日本銀行短期経済観測調査)」のようにある期間に区切りアニメタレントの出演数を調査することにより現状の動向を分析する。
データは「しょぼいカレンダー[*1]」から TCVV の算出基準[*2]により機械的に抽出したものである。

集計方法は新規出演数を四半期毎に集計し合算した後、4 で除することで四半期当たりの新規出演数の平均値を算出する。この値を「短期的な活性度（単純活性度)』と定義する。

ただし、人間は忘却をする性質があるので『単純活性度』だけでは感覚に合致しないと考える。最近の出演した方がより印象が深い。そこで人間の感覚を取り入れるため過去を割り引いて考えた『感覚活性度』も同時に算出する。
具体的な算出方法は 4Q 前は出演数に 0.25 を、同様に 3Q 前は 0.5、2Q 前は 0.75 を乗ずることで重み付けし人間の感覚により近い活性度を算出する。
活性度が 1.00 以上ということはクオータ毎に平均して新規 1 本出ていることになりコンスタントに新規出演していると言える。言い変えれば『常に新しい状態』である。

順位に関しては感覚活性度を優先とし、感覚活性度が同値の場合は単純活性度で比較した。また調査結果については誌面を圧迫するため女性声優のみの調査とし上位 22 名までの掲載とした。
(標本数 女性 280 名)

1.2　調査期間

西暦 2022 年 1 月～2022 年 12 月

本調査は十分な調査をしていますが完全性を保証するものではありません。
また今後の動向については現時点でのデータからので予想です。

[*1] http://cal.syoboi.jp/
[*2] 無料地上波放送の TVA レギュラ出演のみで単発出演は除く

1.3 集計

2022 年 TCVV アニメタレント短期観測調査

順位	氏名	2022/4Q	2022/3Q	2022/2Q	2022/1Q	単純活性度	感覚活性度
1	日笠陽子	4	8	6	9	6.75	3.81
2	竹達彩奈	10	1	2	3	4.00	3.81
3	佐倉綾音	7	2	5	4	4.50	3.00
4	早見沙織	5	4	7	1	4.25	2.94
5	小松未可子	2	8	4	3	4.25	2.69
6	東山奈央	3	6	4	4	4.25	2.63
7	石見舞菜香	4	3	7	1	3.75	2.50
7	潘めぐみ	6	2	4	2	3.75	2.50
9	井上喜久子	5	4	4	0	3.25	2.50
10	大西沙織	3	5	4	4	4.00	2.44
11	高梁李依	4	4	2	4	3.50	2.25
12	M・A・O	1	4	6	7	4.50	2.19
13	大久保瑠美	5	3	3	0	2.75	2.19
14	小倉唯	5	1	4	4	3.50	2.19
15	金元寿子	4	3	4	1	3.00	2.13
16	和氣あず未	4	5	1	1	2.75	2.13
17	悠木碧	4	3	1	6	3.50	2.06
18	大地葉	3	4	3	2	3.00	2.00
19	白石晴香	6	1	1	3	2.75	2.00
19	種崎敦美	6	1	1	3	2.75	2.00
21	花澤香菜	3	2	5	3	3.25	1.94
22	一ノ瀬加耶	3	3	5	0	2.75	1.94

1.4 傾向分析

今回の調査は 2022 年の 1 月から 12 月までの調査なので年間活動と見ることができる。
前回調査から 3 年ほど経っているので新人勢がかなり食い込んで来るかと思っていたが予想に反して中堅勢が上位を独占する結果となった。
1 位は日笠陽子でありダントツである。アイドル的な活動をしている訳ではないが、安定した演技の他に製作者側から気に入られているということが大きいと考える。
そんなベテラン・中堅勢の厚い壁の中、いくばくかではあるが新人が上位に喰い込んで来ている。
なお上位 20 位以内にはいっていないからと言って出演数が少ない訳ではない。事実、年間平均 1 本以上出演していても 85 位である。
大橋彩香が今年あるテレビ番組にゲスト出演した際、今年はオーディションで連敗続きだったと語った。CD

を出したり様々な作品にキャスティングされたりした者であってもこのような形である。[*3]
昨今は厳しくなっている物語る例であろう。

1.5 際立つ状況および気になる状況

1.5.1 日笠陽子、竹達彩奈

前述したように日笠がダントツである。制作側に人気があるとのことであるが誤解を恐れずに言えば非常に使い勝手が良いのかと思われる。また、次点で竹達である。日笠、竹達はいずれも既婚である。日笠はともかく竹達はアイドル的な活動をしていたことで結婚により一時期はファン離れしていたが、ここまで大幅に回復した。これは非常に興味深い結果である。

1.5.2 石見舞菜香

このベテラン、中堅ばかりの中、7 位と大健闘している。ただ声質が多くなく一定方向に固定さえつつあることが今後の不安要因である。

1.5.3 潘めぐみ

デビューしてから随分と経過し中堅の仲間入りしつつある。中身を見ると新規というより続編での出演が多く特に NHK での出演が多い。

1.5.4 大地葉

決して新人とは言い難いが上位に食い込み大健闘した。主役級は少ないのの地道に主演数を伸ばしていることから縁の下の力持ち的な存在で今後も長続きできるのではないかと考える。

1.5.5 白石晴香

直近の新人とは言い難いが多数の中堅の中、20 位以内に食い込み大健闘している。

1.5.6 市ノ瀬加那

これまで主役級はいくつか演じてきたが「機動戦士ガンダム-水星の魔女-」のメインキャストに抜擢されたことで声優に詳しくない層にも一気に知名度が上がったと考える。このガンダムが代表作になると考える。

1.5.7 ミュージックレイン三期生

新人として注目していた三期生メンバー。発表されてから暫く経つが全くの圏外というかゼロ。ミュージックレインが今後どのように育て行くのか不安である。

[*3] ホリプロインターナショナルが声優に力を入れなくなったのかも知れない。

不定期連載記事

2 『声優アワード』Watch Vol.8

TCVV 情報管理部 調査課 声優アワード担当

2.1 はじめに

今年の声優アワード、誰が受賞したか覚えているだろうか？
声ヲタの皆さんであれば毎年開催されてる声優アワードで誰が受賞したのか当然憶えているハズ。ちなみに当方は全く憶えていない。本サークルは声優評論系ではあるが声優アワードには殆ど興味感心が無い。(素も子もない発言)
恐らく大半の人も興味関心が無いかと思う。このことが声優アワードの問題の本質と考える。
復習の意味もかねて今年の受賞者を見てみよう。

2.2 受賞者一覧 (1 群のみ掲載)

主演男優賞	小野賢章
主演女優賞	緒方恵美
助演男優賞	立木文彦、中村悠一
助演女優賞	小松未可子、高橋李依
新人男優賞	市川蒼、川島零士、佐藤元
新人女優賞	相川奏多、赤尾ひかる、稗田寧々、矢野妃菜喜
歌唱賞	斉藤壮馬
パーソナリティ賞	櫻井孝宏

2.3 所感

主演賞および助演賞は手堅い感じで異論はあまりないというのが正直な感想である。
が、新人声優賞は「殆ど出ていないじゃないか!」とか「○○の方が印象深いわ」という感想が出てくるかと思う。「アレっ？」て感じで何の役をやっていた人だろうという思いが強く『印象に残る』という命題に対して疑問しか無い。
以前から申し上げているように新人賞はムリクリ受賞者を出せなくても受賞者無しの年があってもいいじゃないかと思う。

MVS は長年、神谷浩史が受賞して来たが既婚者であることが発覚してから一気に票が離れてしまい、ここ 2 年は下野紘が受賞している。MVS は露骨なファン投票であり票が固定化してしやすいことが露呈した。また既婚であることが発覚ことの衝撃の大きさを物語っている。逆に最初から既婚者であることが判明していればダメージは少ないようだ。

声優アワードは次回の開催も既に決定しており MVS に関してしては投票は既に締め切られている。前年の 10 月から今年 9 月末までが対象期間である。従って本年 10 月以降に「とても印象深い人」が出現しても当該粘度分には反映されない。この辺りも問題と考える。とりあえず期待せずに結果発表を待つとしよう。

連載記事

3　ナナニジ Watch Vol.1

調査部

はじめに

謎の「デジタル声優アイドル」であるナナブンノニジュウニ（以下、ナナニジ）。
○○ 48 や○○坂などの単純なアイドルであれば放っておくところだが声優と名乗っている以上その動向を掴んでおきたい。

今年の動き

昨年は相次ぐメンバーの卒業で一時期は解散も噂されたが新メンバー募集の要項が発表されて解 散しないことでファンは一安心したことだろう。そして、今年 2 月に新メンバーが発表された。
補充分の 5 人程度かと思っていたが一気に 8 人が新規加入した。11 人から 14 人へと大幅アップした形だ。正直なところここまで増えるとは思わなかった。
その後、トントン拍子で担当キャラクタも発表になり、レギュラーの冠番組である「22/7 計算中」にも出演を果たした。さらには加入早々で全国ツアーまで行った。
ナナニジには「11 人が集った理由」という曲がある。メンバーが合計 14 人になったので、その曲は永久封印かと思っていたらライブで普通に歌っていた。

相変わらず方向性が見えない。

結局、何やってんの？

「デジタル声優アイドル」と冠しているが「声優っぽいこと」を行っているのは冠番組の「22/7 計算中」ぐらいだが**かなり手の込んだ Vtuber** という感じである。当初アニメ化という大きな目標があったけど、それも達成していまい、その後やっていることは通常のアイドルグループとほとんど変わらない。

辛うじて声優として仕事をしたのが天城サリーだけである。直近では先般「ぼっち・ざ・ろっく」に出た。ただ「ぼっち・ざ・ろっく」については、その背後にソニーがいることに注意したい。かつてのキングレコードのヤリ方を彷彿させて非常にイヤな感じである。
その天城であるが来年 1 月に放送される「トモちゃんは女の子!」にレギュラー出演予定である。ただ毎度毎度、外国人キャラでの出演であり限界が見えつつある感じである。

先般、2023 年 1 月から新メンバによる定期公演が発表された。
既存メンバーの時もアニメ放送前に同じように定期公演が企画された。おそらくは新メンバー周知とアニメ 2 期のための布石と思われる。リアルメンバーが不自然な形で卒業してしているが、アニメ 2 期ではキャラクターでどう扱うのだろうか。アニメ「22/7」での超展開シナリオを鑑みるとアニメ 2 期のシナリオがまともになるという気が全くしないが...。それ以前に棒読みは改善されるのか。考えれば考えるほど、このグループのやりたいことが見えない。

連載記事

4　声優システム論 16-声優たちはどういきるか-

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。
そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。[*4]
本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. 分類

声優を技量に応じて分類すると以下のようになるかと考える。

特 A 群	演じ分け出来る、多数の声色が出せる。
A 群	演じ分けはできる。
B 群	棒ではないがこれと言った特徴はない。
C 群	棒声優 (論外)

本分類は自称声優とか Vtuver は含まれない。あくまでもきちんとデビューしている前提である。本格的にデビューしているにも拘わらず棒声優はいる。この残念な C 群は正直評価に値しない。論外。耳触りなんだよ。正直、何を基準で監督や音響監督は何を以って選んだのか小一時間問い詰めたい時がある。(横道に逸れた)

いわゆるスター声優は A 群。さらに特 A 群は演じ分けだけではなく、声色のそのものがバラエティ豊かで、同一人物とは思えない演技をする者とした。声優として喰える人々は特 A 群、A 群と B 群の一部であろうと思われる。

2. 差別化うまくいってなくない？

過去においては A 群、B 群で差別化のために歌手デビューや雑誌への積極的な露出。またゴリ押しキャスティングなどが蔓延っていた。

A 群において、さらなる先鋭化を狙ってこれと言って特徴の無い者 B 群は何らかの差別化をするしかない。が、最近ではその傾向が減ってきたと思う。

その理由はいくつかあるが業界の構造変化が大きいのでないかと思う。

新人声優の一大供給産地となっている響。響はバンドリ、4DDJ と音楽系作品をメインで新人を輩出している。ユニット作戦の急先鋒となっている。
さらに差別化の急先鋒だったキングレコードが没落して、かつての勢いが無くってしまっている。

[*4] システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満している。

かつてキングレコードは講談社ラインから講談社原作のアニメにキングレコードが乗り所属アーチストが入って来やすい状況だったが。ここんところキングからヒット作も出ていない。ヒットはソニーばかり。

昨今ではゲームの影響でアイドルアニメが多く製作されることでグループやユニットでの露出が目立ち以前よりも個人での活動は埋もれているように見える。ここでソロで売り出しても成功するとは言い難い状況ではないか？

写真集など出しても新規性や話題性に乏しい。つまり飽きたのではないか。

3. 我々は恩恵を受けている

ここ 10 年余りの過当競争により声優全体の技量の底上げが行われて A 群が充実化してきていると見られる。それにより TCVV を創設した頃に問題視していた C 群がほぼいなくなった。競争激化であれば一歩先ん出るため差別化したいところであるが差別化するにももうこれ以上の差別化が不可能なレヴェルまで来ているので費用対効果が望めない。この過当競争の恩恵を受けているのは実は我々サイドではないかと思う。これは声優にとって非常に過酷な状況を物語っている。過去あった差別化の手段が封じられた。

4. 今回のまとめ

- 過当競争で層が充実して棒が絶滅。
- 業界内の構造変化でスタチャが没落。
- 単体からアイドルユニットへシフト。
- 露出するものがいない。
- 弾切れ
- 恩恵をウケているのは我々

編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。
今回はいつもよりページ数が少な目です。全くもって時間が無くて、まとめ切れずこじんまりとなってしまいました。ただ、内容としては持続可能という時代に沿ったテーマでまとめてみました。

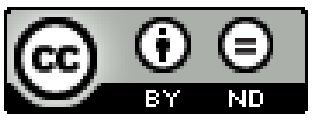
今回は久々にアニメタレント短観を調査しました。
集計方式は従来どおりとしました。コロナ禍でサークル参加出来ない間に多くの新人声優も出てきたので勢力図はだいぶ変貌しているかと思いましたが、イザ蓋を開けてみて驚きました。
中堅とベテランが上位を独占しており新人勢は多くありませんでした。これは若手にとってはとても分厚い壁だと思いました。ホント、見ると 4 年前とそれほど変っていません。

「レッドオーシャンなんてレヴェルじゃねーぞ。」と思いました。

以前から本誌では声優になるには茨の道であることを伝えていました。この手の言論は本誌以外でも多く語られており最近では広く周知されているかと思います。
なんとか、めでたく事務所所属になって声優として活動を始めたとしても、このようにこの分厚い壁が立ちはだかっている。しばらく前に「底辺声優の所感」という note の記事が話題になりました。声優という生業は持続することがホントに厳しい世界なんだと改めて痛感しました。
ベテランからも使い捨て状態を嘆く発言が相次ぎました。業界内でも危機感があるようです。
さらに近年はコロナ禍の影響で密を避けるため収録が分散してなされており先輩の演技を間近で見る機会が減って新人の技能向上に支障が出ているとの話があるそうです。こう見ると声優というシステム自体が持続可能な状態ではなくなってしまいそうです。

今回まとめている中でふとキングレコードの神通力が効かなくなっているとも感じました。一時期は飛ぶ鳥を落とす勢いだったのに今ではソニーグループにお株を奪われた感じです。まさに諸行無常。随分と前から所属「あーちす」とをリストラしてすっかり小さくなってしまった感じがします。
そして今やソニーグループの影響力は強大となっています。ソニーが今の声優システムを左右していると言っても良いかも知れません。

さて TCVV は気がつけば設立 25~~執念~~周年です。この間に様々な提言や啓蒙をしてきました。
設立時にいた「露出は一人前だけど演技が今ひとつ」という声優は過当競争の影響か激減したと感じます。棒読みは減ったことは喜ばしいことですが別の新たな問題も生まれてきています。我々は弱小サークルなので「ゴマメの歯ぎしり」よろしく全くの無力ですが我々の考えに共感・理解をしていただいている方々もいるかと思っています。業界界隈で問題になっていることは我々が以前から指摘してきたことです。従って TCVV の考え方自体は間違っていないと確信しています。
それを後ろ盾にして暫くは活動していきたいと思います。取り敢えずは 30 号までは続けたいと思います。
それでは次回もよろしくおねがいします。ではまた。

2022 年 12 月 30 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 22 号 通巻 26 号
発行 「声優は Visual に出るな!会議」情報管理部
組版 LaTeX2e (Cloud LaTeX)
発行日
2022 年 12 月 30 日（初版）
連絡先
「声優は Visual に出るな!会議」
代表者　萱沼真一
URI http://www.tcvv.org/
E-mail info@tcvv.org
Twitter http://twitter.com/tcvv
Copyright (C) 2022 The council of ‘Voice actors should not appear in Visual’